

未来への伝承

第171回

沼尻墨僊筆「鍾馗図」

—子どもの健やかな成長を願う—

たくわえた髭を逆立てながら、暴れる小鬼をしつかりとつかみ、大きな眼でにらみつけています。頭を押さえつけられ、目玉をつままれた小鬼は、なすすべがなさそうです。

鍾馗は、唐の玄宗皇帝の夢に現れ、小鬼を追い払い、皇帝の病を治したと伝えられる中国道教の神です。疫病を払う神として信仰され、日本には室町時代以降にその信仰が伝わっており、端午の節句には、鍾馗の人形や絵を飾られるようになります。

鍾馗の画像は、唐の呉道子（呉道元）に始まるといえます。巨眼多髭の風貌で、冠をつけ、黒衣をまとい、抜剣して小鬼を捕らえる姿などで描かれ、その特徴を示しています。

朱色・赤色は、疫病除け、特に疱瘡除けの効果があると信じられてきました。この作品は朱で描かれていることから、同様の効果を期待したのでしょうか。疱瘡は、天然痘ともいい、ウイルスによる感

染症で、伝染力がきわめて強く、死亡率も高く、発疹は体に深く傷跡を残すものでした。1980年にWHO（世界保健機関）が根絶を宣言していますが、2回の予防接種が義務とされていたため、幼少期に接種したご記憶のある方もいらっしゃるかと思います。

本図は、朱色と橙色を使い分けながら、強弱、抑揚のある線を用い、鍾馗の力強さがよく表現されています。作者の沼尻墨僊（1775～1856）は、江戸時代後期に城下町土浦で生まれ育ち、20代で塾・時習斎「天章堂」を開き82歳で亡くなるまで、多くの子供たちの教育に携わりました。世界地理にも詳しく、晩年は開闢できる「大興地球儀（傘式地球儀）」を創作したことで知られていますが、和歌や詩文をたしなみ、書画も得意としていました。

この鍾馗を描いたのは天保11（1840）年の晩秋、墨僊が66歳のときです。63歳で教育の功勞により、土浦藩から褒賞され、年間米5俵を

下賜されるなどしています。塾は、墨僊が没する直前まで入門者を受け入れ、後継者である墨潭とともに、教育に貢献しました。多くの子どもや若者たちと触れ合うなかで、その健やかな成長を願う気持ちも強かったのではと推測されます。

博物館ではこの作品を10月17日（日）まで開催するテーマ展「災害の記憶をたどる」中でご紹介していきますので、ぜひご覧ください。

岡市立博物館（☎824・2928）



沼尻墨僊筆「鍾馗図（部分）」